

京極読書新聞 <第73号>

発行日 平成27年11月1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館



4年ぶりの小樽です！



後志文学散歩 「小樽・海山めぐるバスの旅」

平成27年10月10日(土)

早いもので、「バスの旅」も今年度で7年目。後志文学にとって、見るべきものはほとんど見たと
いっていい状態の中での、今年の「小樽・海山めぐるバスの旅」でした。平成21年の「石川啄
木」、平成23年の「小説『春蘭』（峯崎ひさみ著）」といったテーマを踏まえて、今回の小樽テ
ーマは「建築」としました。小樽の街に残る建築家・田上義也の作品。あるいは、街の歴史の中に姿を
消していった名建築の面影をたずねまわりました。まずは最初の訪問地、小樽市入船の旧坂牛邸をめ
ざして、午前9時、バスは京極を出発です。（湧学館／新谷保人）



▲小樽市入船の旧坂牛邸（田上義也記念室）にて

◆ 1. 毛無山展望台

小樽は、一方を海に、一方を山に囲まれた、考えてみるとなかなか不思議な造りの街です。春香山（はるかやま）、於古発山（おこばちやま）、天狗山、遠藤山、塩谷丸山といった山々の中から、この日は於古発山の周りを走る国道393（メイプル街道）を使って小樽に入りました。途中の毛無山展望台では、小樽市内にかかる大きな虹を、虹と同じ高さから見るという珍しい体験をしました。



◆ 2. 旧坂牛邸（田上義也記念室）

10時半、旧坂牛（さかうし）邸に到着。北海道を代表する建築家・田上義也（たのうえ・よしや）の作品は小樽市内に5つ残っていたのですが、内、2つは現在でも人が住んでいる民家なので勝手に敷地内に入ることはできません。春香山には彫刻家・本郷新が使っていたアトリエが残っていますが、こちらも老朽化が激しくて立ち入ることもできない。さらに、女優・中山美穂主演の1995年の映画『ラブレター』でヒロインが住む家として使われた銭函の坂（ばん）別邸に至って

は、2007年の火事で全焼してしまいました。今、北海道中の田上建築がこういう状況にさらされている中で、造った当時の姿で管理・保存がなされ、なをかつ、建築の中にも入れるという旧坂牛邸のありがたさにいつも頭が下がる思いです。

旧坂牛邸。坂牛祐直（すけなお）・直太郎（なおたろう）親子が暮らした家。祐直も直太郎も、当時の北海道を代表する大新聞「小樽新聞」（現在の「北海道新聞」の前身）の重役の家柄で、特に坂牛祐直については、明治41年の石川啄木日記にその名前が出てくるなど、小樽という街の名門中の名門、有名人中の有名人ではありません。旧坂牛邸は、こういう北海道の文化人や実業家たちに愛され受け入れられていった田上義也という人の魅力や実力を余すところなく伝える貴重な北海道遺産といえるでしょう。それが、京極から1時間半で行ける小樽にあることがなんともうれしい。

◆ 3. 小林多喜二文学碑（旭展望台）

小樽商科大学へ登って行く急坂が「地獄坂」。学生だった伊藤整や小林多喜二が登校した坂。花巻農学校の修学旅行生を引率した宮沢賢治が登っていった坂。その地獄坂途中の枝道に入って、しばらく林を登りつめたところに旭展望台があります。そこには小林多喜二の文学碑がひっそりと建っています。碑のデザイン・制作は、なんと本郷新！ 言われないとなかなか気づきませんが、碑の右上には本郷新の手になる「小林多喜二」レリーフもあるのです。

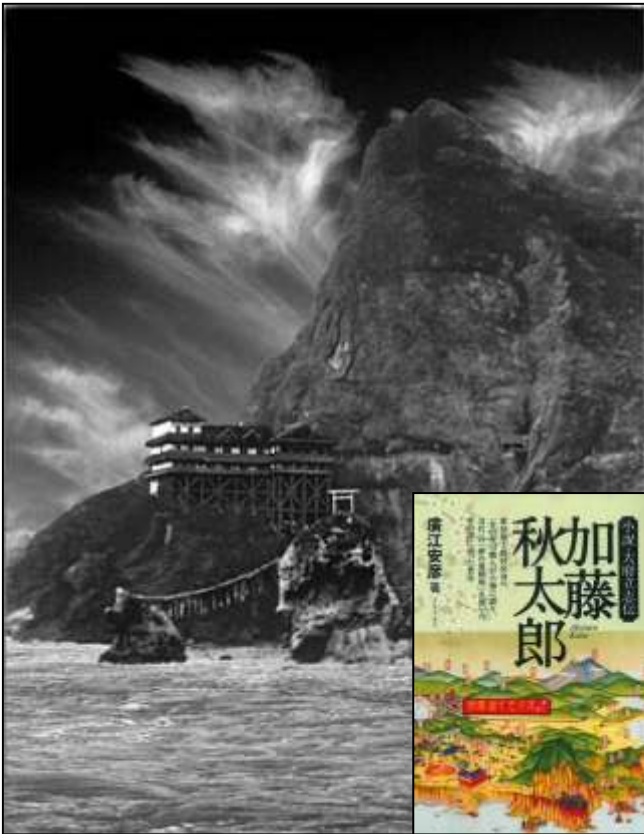
本郷新はけっこう後志と縁が深く、例えば、近年NHKの朝ドラ『マッサン』で大ブレイクしたニッカウヰスキー余市蒸留所。あそこに創始者・竹鶴政孝の胸像が建っていますが、あれも本郷新だったりします。思ってもいない場所で本郷新に出会う、後志っておもしろいところですね。



4. 天狗山山頂駅～ロープウェイ ～麓駅～グラス・スタジオ

山頂駅から、各自ロープウェイで麓駅に降りてきて、グラス・スタジオin小樽で待ち合わせ…という計画だったのですが、強風のためロープウェイが30分間くらい止まってしまって、ちょっとヒヤッとしました。

5. 龍宮閣跡（オタモイ海岸）



日本が太平洋戦争に突入する5年前、オタモイ海岸に突如そびえ建った「龍宮閣」を写した写真は数あれど、おそらく、この写真がベストではないかと思います。小樽最初の寿司店「蛇の目寿司」の創始者・加藤秋太郎の一代の夢「小樽の街に龍宮城」が、見事、現実に形をとって立ち現れた瞬間です。

その後、戦争期の閑古鳥時代（「贅沢は敵だ！」と声高に叫ばれた時代）を経て、戦後期の再開の夢もかなわず、昭和27年に火事で焼失するまで、龍宮閣が小樽に生きていた時間はわずか十数年にすぎないことを思う時、この断崖絶壁の建築物の異様さがいっそう心に沁みるのです。

バスの中では、廣江安彦さんの小説『加藤秋太郎 小説・大府立志伝』に大きな注目が集まりました。この本には、なんと「京極さん」が登場するのです！「京極さん」は、明治三十年、京極高

徳が羊蹄山麓に京極農場を開いた時の最初のメンバー。その後、農場の冷害凶作や野ねずみの大発生に愛想を尽かして、ひとり小樽に飛び出した人物として描かれています。小樽で大工の才を活かして一本立ち。今度は、蛇の目寿司～龍宮閣誕生の影の立役者として加藤秋太郎を応援して行くというストーリー展開に、「変なところで京極と小樽がつながったね」と驚きの声があがりました。



6. 浜小樽駅・有幌倉庫群（運河論争）

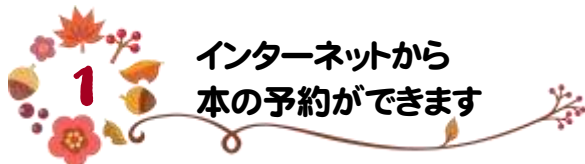
今回のバスの旅では、かつて小樽にあった「国鉄浜小樽駅」と「有幌倉庫群」の正確な場所を知りたくて、小樽市港湾部が発行した『小樽港要覧 1983』の地図を使いました。1983～1984年という年は、小樽の歴史をかじった人ならすぐにピンとくる年です。それは、小樽運河論争。1983年は、運河に隣接する有幌倉庫群が破壊・撤去された年でした。翌1984年には浜小樽駅も廃止。運河埋め立てまでの時間が刻々と迫っています。ここで、運河論争は大きな展開を迎えます。今まで五分五分の展開だった「埋め立て派」対「保存派」の力関係は、「保存派」の優勢へと大きく切りかわって行くのです。有幌の倉庫群が消滅したことによって、小樽市民はようやく「今、私たちは何をやろうとしているのか」に気がついたというべきでしょうか。運河埋め立てを傍観している私たちって何なんだ…という想いが次第に高まって行ったのです。

もうひとつ面白い発見がありました。この1983年の小樽地図に、試しに今回の2015年バスの旅の行路を書き加えてみたのです。すると、どうでしょう。ひとつの問題もなく、この2015年の行路が描けてしまったのです。つまり、小樽って、運河論争以来、全然街路の骨格が変わっていないんですね。これって、すごいことだと思いません。

湧学館がもっと楽しく、便利になりました！

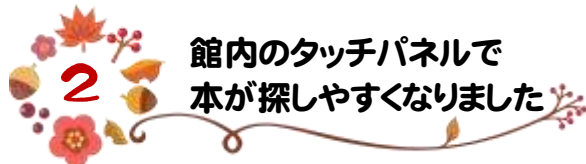
～湧学館インターネットサービスのご案内～

実は、10月から図書館のパソコンや貸出のレシートがちょっと変わっています。ほかにも便利な機能が増えましたのでご紹介しますね。



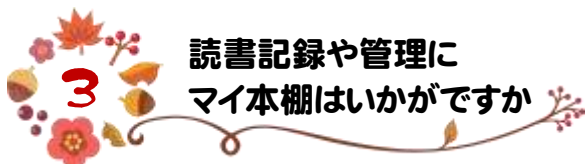
1 インターネットから本の予約ができます

検索した本が貸出中の場合、予約申込のボタンが表示されます。本の用意が出来次第、電話またはメールでご連絡します。
※メール連絡にはアドレスの登録が必要です。



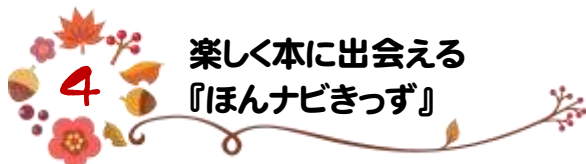
2 館内のタッチパネルで本が探しやすくなりました

検索した本の情報をレシートに印刷できるようになりました。また、ゆうくんすいちゃんが画面を歩いて、本の場所を案内してくれます。テーマ別の本もご紹介しています。



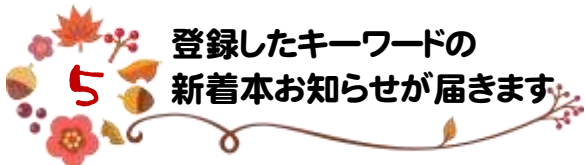
3 読書記録や管理にマイ本棚はいかがですか

「読んだ本の記録をつけたい」、「読みたい本のリストを作りたい」という時にぴったりです。図書館で借りた本、予約した本を自動的に登録していくこともできます。



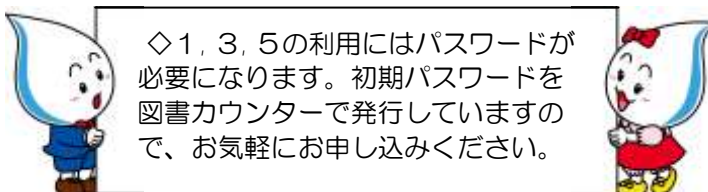
4 楽しく本に出会える『ほんナビきっず』

「ほんナビきっず」は好きな絵や言葉から本を探ることができる、こども向けの図書検索サービスです。キャベツくん・フタヤマさんと一緒に楽しく本を探してみましよう♪



5 登録したキーワードの新着本お知らせが届きます

あらかじめキーワードを登録しておく、それに関する新着資料があった場合、メールでお知らせします。本のタイトルや著者名も指定できます。*アドレスの登録が必要です。



◇1, 3, 5の利用にはパスワードが必要になります。初期パスワードを図書カウンターで発行していますので、お気軽にお申し込みください。

京極読書新聞は
毎月1日発行です。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

